

あ い さ つ

会長あいさつ

A greeting from President of Okayama Association for Laboratory Animal Science

国枝 哲夫
Tetsuo Kunieda

岡山大学大学院環境生命科学研究所
Graduate School of Natural Science and Technology, Okayama University

昨年の岡山実験動物研究会の活動を振り返ると、この1年間は研究会にとって大きな意味のある年だった様に思われます。すなわち、6月26日に川崎医科大学で開催された第69回研究会、12月11日に岡山理科大学にて開催された第70回研究会は、それぞれ岡山実験動物研究会の今後の活動を展望する上で重要な意味を持っていたと考えています。

川崎医科大学の大熊誠太郎会員、三上崇徳会員の世話役で開催された第69回研究会では、特別企画として「動物実験と社会—適切な動物実験の実施体制を考える—」と題したシンポジウムを企画し、文部科学省研究振興局ライフサイエンス課の勝股靖貴氏より「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針について」、公私立大学動物実験施設協議会会長である京都府立医科大学大学院医学研究科実験動物センターの喜多正和氏より「動物実験を実施している研究機関等の責務について」、岡山大学自然生命科学研究所支援センター動物資源部門の樺木勝巳氏より「岡山大学における動物実験に関わる機関管理体制の構築」の3題の講演をいただきました。現在、動物実験の実施にあたっては動物愛護の精神に基づいた社会的にも法的にも許容される適正な動物実験を実施することが不可欠となっていますが、第69回研究会における企画では、これらの動物実験の適正な実施に関連した情報を広く会員に提供できたのではないかと考えています。今後も、適正な動物実験実施のために必要な情報の交換の場として研究会が機能していくことが重要と考えています。特に、岡山県内で動物実験を実施している多様な研究機関の情報交換の場として、また、広く中国、四国地方の実験動物関係機関の情報交換の場としての機能を果たしていくことができると考えています。なお、第69回研究会に際しては、最近問題となることの多い論文の盗用、剽窃などの研究不正に対して研究会

としても明確な基準を示した方がいいとの指摘を会員より受けています。重要な問題ですので、今後、時間をかけて研究会でも検討していくことが必要と考えています。

岡山理科大学の織田銃一会員、愛甲博美会員、城ヶ原貴通会員、目加田和之会員を世話役として開催された第70回研究会では、研究会例会とともに日本実験動物学会との共催により、第4回実験動物科学シンポジウムが開催されました。このシンポジウムは毎年、日本実験動物学会が地域の研究会等と共催により、実験動物科学に関わる特定のテーマについて開催されているもので、今回は「新たな疾患モデル動物が切り開く橋渡し研究」と題して1. スクスの疾患モデルとしての可能性を探る、2. 新しいモデル動物—ツパイ、フェレット、3. トランスレーショナルリサーチのための新たなモデル動物と作出の3セッションで計8名の演者の方から講演いただきました。日本実験動物学会は、実験動物に関する日本における中心的な学術団体として、実験動物科学の発展にこれまで多大な貢献をしています。岡山実験動物研究会は、地域の学術団体としてこれまでにおける実験動物科学の発展に貢献できるよう努力してきましたが、他の地域の実験動物研究会と比べると、全国的な情報発信という点では見劣りする感は否めませんでした。しかし、今回日本実験動物学会との共催でシンポジウムを開催することで、岡山実験動物研究会の存在と活動を全国に知っていただくことができたのではないかと思います。今後も日本実験動物学会との連携を強めるとともに、他の地域実験動物研究会との交流も深め、岡山実験動物研究会の活動を全国にアピールできればと考えています。

以上、昨年の研究会活動を振り返ると、この1年間の研究会活動をさらに発展させることで、岡山実験動物研究会の今後の活動の新たな展望が見えてくるのではないかと考えています。